



はじめに



転んで強く打ったり、切り傷を受けた時、わたしたちは強い痛みを感じます。受傷により痛みを伝える神経が刺激されて起こる痛みですがしばらくすると消えます。これに比べ、がんの痛みは、一度起こると増強しながらいつまでも長く続くことが特徴です。がんは周囲の組織を圧迫、破壊して、痛みを伝える神経を刺激するために持続する痛みが生じます。今、この痛みを緩和する治療に関心が寄せられ、その主役が鎮痛薬のモルヒネです。

いまだ誤解が多く、使用をためらう患者さまや医師が少なくありませんが、適切に使えば、がんの痛みの9割以上を取り除くことができます。

今回は、緩和ケアの代表的な医療用麻薬系鎮痛薬、モルヒネに焦点をあててみたいと思います。



事例5 (訪問看護センター)



患者さまは83歳の女性の方でした。進行性の胃がんで手術をして半年後に再発しました。

「何があっても病院には行きたくない」という患者さまと「自宅で介護をしたい」というご家族(長男、次男、次女)の強い希望があり、在宅ホスピスの方針で近所のホームドクターにケアをお願いしました。

往診して点滴をしてもらっていましたが、「うーん、うーん」と波のように襲う腹痛と、睡眠中に突然おびえながらうなされ、興奮状態のせん妄と不眠に対して、ご家族は、「これは仕方がないのだ」と考え、半ばあきらめながら様子を見ていました。ご家族には、患者さまの夫であるお父さまを看取られた経験がありました。お父さまの最期は肺癌の痛みと苦しみで壮絶だったそうで「痛みはあるもの」、「超えなければいけないもの」という思いがあり、お母さまの場合もそう覚悟されていたようです。

また患者さまにも、夫を看取った経験から、死へ

の苦しみの恐怖感が強く、不安で興奮した様子が続きました。

ご家族は覚悟をされているとはいえ、患者さまが興奮して訴えることに対して、ご家族もまた混乱してしまう悪循環な状況で、このままでは自宅での介護が続けられなくなると訪問看護師は考えました。

そこでホームドクターに相談すると、興奮の原因のひとつである身体的な苦痛を取るため麻薬系鎮痛薬の使用に踏み切りました。患者さまとご家族は麻薬系鎮痛薬の使用に不安を感じておられ、日常の介護で慌しく混乱している様子から正しい服用ができない可能性もあり、ホームドクターと相談し、薬剤師が訪問して服薬指導^{注1)}を行いました。ご家族は冷静に話が聞けたようで安心された様子でした。目立った薬の副作用は「眠気」でしたが、せん妄(以前あった興奮した状態)は消失し、身体的な苦痛は緩和されたようでした。その後病状の進行から、急変する可能性が高いことをお伝えしましたが、在宅での介護を継続され、患者さまは、ご家族に見守られながら、安らかな最期を迎えられました。

訪問看護師の感想

患者さまが麻薬を使用することで興奮状態がなくなり、ご家族は落ち着いて介護できるようになった印象がありました。

次女さんはお母さまへの思いを色々語られ、手をさすりながら「話せなくなったし、いよいよお別れが近づいたようです。親戚に会ってもらったほうがいいですか?」と話されました。次女さんは受容された思いを語られるようになり、訪問看護師も、ゆっくりと次女さんの話を聞くことができました。「お母さんが、お別れの準備の時間を下さっておられるようですね。」と話す、次女さんは「準備は出来ません。その場になったらどうなるか分かりません。」と答えられましたが、最後の看取りのときには、大変

落ち着いて対応されていました。



注1) ご家族には、在宅医の指示で、指定の処方箋薬局から薬剤師が自宅に出向き、服薬指導しました(介護保険で居宅療養管理指導量として処方時に500円かかります)。

モルヒネについて

第1回

**Q1 . モルヒネをのむと、いよいよダメかと思っ
ていましたが、仕事もできるのですか？**

A1 . 会社に勤務しても、自営の仕事をなさっても全く問題ありません。

またモルヒネを使って痛みが消えた患者さまが、モルヒネをのみながら海外旅行できる法的な道も開かれています。



Q2 . モルヒネをのみ続けると、からだが弱ったり、いのちを縮めたりすることはありますか？

A2 . 痛みが続くと、眠れない、食べられない、考えられないといったように、日々の生活の基盤が壊れ、身体も心も疲れきってしまいます。しかし、モルヒネなどの痛み止めの薬を使って痛みがなくなれば、よく眠れるようになり、よく眠れると食欲も出てきて、よく食べられるようになり、



体力が回復に向かい、仕事や趣味などやりたいことができるようになります。いのちを縮めるようなことは、決してありません。

Q3 . モルヒネを使い始めると、使っているうちに量が増えて中毒のようになり、また使い続けていると、癖になったりすることはありますか？

A3 . 医師が決めた量と時間を守ってモルヒネを使っていれば、患者さまがモルヒネを使っても、依存症にはならず、危険なことは、ほとんど起こりません。痛みが増えると、痛みをとめるためにモルヒネの量も増えるので、癖になったような気持ちになるかもしれませんが、痛み



合わせてモルヒネの量を調節しているのです。

Q4 . モルヒネは強い痛み止めの薬といわれましたが、モルヒネでも痛みがとれなくなったら困るので、痛みを我慢していただきたいのですが ……

A4 . 痛みを我慢する必要は全くありません。今、使っている量のモルヒネが効かなくなった時には少し量を増やすと、また痛みがなくなります。痛みの原因によっては、モルヒネが効きにくい痛



みのこともあります。痛みをとめる方法は、たくさんありますので、主治医とよく相談して下さい。

Q5 . 痛みがとれると、すべての感覚がなくなってしまうませんか？

A5 . そのような心配は全くありません。モルヒネを使って痛みを取り除いても、身体をつねれば、いつものように痛みを感じますし、熱さ、冷たさ、味覚などの他の感覚も全く変わりがありません。ただし「心が痛む」とか、「胸が痛む」という表現があるように、痛みには情動的な要素も深く関与します。楽しみ、微笑み、親しみ、馴染みとい



った人間関係は、痛みを和らげ、苦しみ、悩み、ねたみ、悲しみ、ひがみ
暗い気分などは、逆に痛
みを増強させます。



Q6 . 痛みがなくなっていくのは大変うれしいのですが、薬には副作用がありますよね。モルヒネをのむと、どんな副作用が出ますか？

A6 . モルヒネをのみ始めた最初の頃に吐き気や嘔吐、便秘を訴える人がいます。このような副作用は、他の薬で予防することができます。その他に、眠気、口渇(のどがかわく)、めまい、かゆみなどが出る人もまれにいます。疑問があれば、遠慮な

ご相談ください



Q7.薬がどのように作用して痛みを和らげるのですか？

A7.モルヒネなどの薬は、痛みを伝える神経や、痛みを感じる中枢、脳や脊髄の疼痛中枢に作用して、痛みを少なくしたり、なくしたりします。



Q8.モルヒネはいつ頃から病気の治療に使われているのですか？

A8.明治時代の俳人・歌人の正岡子規は、脊椎カリエスという病気と闘いながら36歳の短い生涯を終えますが、身体中がひどく痛むために1年6ヶ月以上にわたってモルヒネをのんでいました。正岡子規は、モルヒネをのんで痛みを軽くしながら、俳句や和歌を詠み、文章を書きましたが、モルヒネは使用法を守れば、ふつうに生活ができる安全な薬です。



モルヒネは19世紀よりもずっと昔から使われていた薬で、現在でも多くの患者さまが、大きな手術の後の痛みや、心臓発作の時の痛み



モルヒネを使用しています。モルヒネを上手に使うと、手術を受けた患者さまは、手術後の痛みをほとんど感じなくて済みます。

編集後記

モルヒネは、緩和ケアの現場では、欠かすことのできない薬です。ハリウッドの戦争映画の中で、重傷を負った兵士にモルヒネを急いで打つシーンを観て育った若い世代は、モルヒネに対する抵抗感が薄いようですが、覚せい剤の取り締まりキャンペーン、「覚せい剤、やめますか？人間、やめますか？」というセリフから、モルヒネ＝麻薬＝廃人になる、というイメージが、心の中を占めている人も意外に多く、モルヒネに対する抵抗感は、依然として根強く残されています。

モルヒネに対する誤解や偏見を



解くためには、まずモルヒネに対する正しい知識を身につけること。

これが第一で、その一助としてお役に立てば、幸いです。

M.N.

窓口

このレターに対するご意見やご感想がありましたら、下記連絡先までお寄せください。

原 恵里加

通院治療室 内線:2680 PHS:3767

E-mail: es5976@kchnet.or.jp

発行元：財)倉敷中央病院

編集委員長 小笠原敬三

編集委員

庭野元孝(外科医師) 徳田衡紀(薬剤師)

里見史義(作業療法士) 谷妃美恵(医療相談)

光島モトエ(看護師長) 原恵里加(認定看護師)